

## *The Scarlet Letter* における Hester と a wild rose-bush について

長岡政憲

### 1. はじめに

*The Scarlet Letter* の第一章は *The Prison-Door* となっており、この作品の冒頭から暗い陰気な木造の監獄の前に地味な服装をした厳格な清教徒の男女が集まっている場面から始まる。彼らが待ち受けていたのは姦通の結果、赤ん坊の Pearl を産んだため姦淫の印である A の緋文字を胸につけさせられた Hester の刑罰であった。Hester は赤ん坊をしっかりと抱き、錆びた鉄の鋸が打ちつけてある樫材の大戸から民衆の冷酷な視線を浴びながら出てくるのである。この監獄の戸口のすぐ側に野ばらのしげみがあり、囚人達の心を憐れむかのごとく芳香とかよわい美しさを与えている。

さてこの作品は Dimmesdale について多くが語られ、また Chillingworth についても多く語られ、作品のテーマとして人間の罪が取り上げられるが、ある思想を表現するために様々なものが象徴として描かれている中で、冒頭の *The Prison-Door* に見られる、a wild rose-bush が一体何を意味しているのか。そして Hawthorne がそれを象徴としてこの物語に何か美しい精神の花を添え、人間の脆さと悲劇を語る暗い結末を和らげたい<sup>(1)</sup>と述べ、暗い罪の物語に微かな希望の灯を残そうとしている思いとは何であろうか。ことによると a wild rose-bush は Hester を象徴し、Hester の生き方とピューリタン社会との関係についての Hawthorne の考えが表わされているのではなかろうか。また Hawthorne のピューリタン社会に対するある種の批判的な態度の顕れが Hester の行動とその生き方に反映されているのではなかろうかという点について探ってゆきたい。

2.

まず「ばら」のイメージについていくつかをまとめ挙げておきたい。「ばら」のイメージにはいくつかの諸相があり、〔母性原理、肉体的愛、春、若さ〕の項目では、旧約聖書の雅歌2章1節に出てくる「シャロンのバラ」は恋人の意で、豊饒やイスラエルを表わす。ローマでは死者の額と墓にそなえられることから永遠の愛を表わす。初期キリスト教社会では、バラは娼婦が恥辱のしるしとして強制的につなげなければならなかった。〔精神的愛、美德〕の項では、中世において赤いバラは（炎のような）慈愛、（複雑な花卉をもつことから）精神性、さらに浄化による悪の根絶、殉教者を表わす。また〔紋章〕の項では若さ、美、魅力、喜び、無垢、優しさ、沈黙を表わすのである。<sup>(2)</sup>

このようなバラのイメージと Hester を考え合わせると、Hester は姦通の結果ではあるが、Pearl の母親となり、優雅で豊かな肉体を持った若い人妻である。不倫の相手、Dimmesdale との愛を抱きながら永遠に結ばれることを求めてゆく。社会から蔑まれても自分の罪の償いとして貧しい人々や病氣などで苦しむ人々に対し、実に修道女のごとく献身的に奉仕してゆく。そのことの故に罪は浄化されたように民衆には受け入れられ、Hester の存在は高揚するがあくまでも Dimmesdale を擁護し、ピューリタン社会からは自らの精神的な自由を保持しながら魅力を失わない Hester である。このように表面的にみてゆくとバラのイメージと Hester のそれとでは共通性が多く見られるのである。

ではそのバラが暗い陰気な監獄の側に生えていることによって Hawthorne は何を意味づけようとしたのか。峻厳なピューリタン共同体と Hester の関係においてそれを更に考察したいのである。

Hawthorne は The Custom House の中でこの作品を書くことになった動機を述べている。1839年、彼が35才でセイレムの税関に勤めていた時、古い紙屑の中から羊皮紙に包まれた緋色の布を見つけた。それは大文字の A の形をしており、その文字を自分の胸に当てた時、それがまるで燃える赤熱した鉄の文字であるかのような感覚を受けたと語っている。<sup>(3)</sup> A の緋

文字を刑罰として胸につけている女性の素材は Hawthorne の短編集、*Twice-Told Tales* 中の *Endicott and the Red Cross* に見られ、世間や自分の子供の前でAの頭文字をつける運命となった若くて美しい女<sup>(4)</sup>が出てきて、ここに Hester のモデルを見るのである。この短編には17世紀の初期から中期にかけてのピューリタン社会で罪を犯した者に対する刑罰の仕方が書かれている。教会の礼拝堂のすぐ側に清教徒の権威を示す刑具の笞刑柱があり、礼拝堂の片隅にはさらし台があり足枷もあった。*The Scarlet Letter* の1章、*The Prison-Door* でもニューイングランドの清教徒達が英国から脱出した新天地で最初の実際的な必要物として処女地の一部を墓地に、他の一部を監獄の場所に定めることを認めているとしている。<sup>(5)</sup>新天地を監獄という暗い土台で築き上げ、その側にごぼう、あかざ等の醜い雑草が一面にはびこっていた。Darrel Abel によれば、これらは人間の複雑に入り混った道徳的要素で、dim, awful, mysterious, grotesque なものとして象徴されており、不幸にもピューリタン社会はそれらの雑草の種子を耕し、人間の自然な花を無視し、“the rose bush”よりも“the black flower of civilized life”である“a prison”に固執したとしている。<sup>(6)</sup>このような背景にあって Hawthorne はこの作品の冒頭からわれわれに暗示しようとしていることはまず、ピューリタンの新天地であるニューイングランドにおいて彼らの精神生活の柱である教会を建て、彼らの法の執行の場である監獄をピューリタン社会の戒律の土台としたのである。つまり、宗教と政治、法律が一体となっている17世紀のピューリタン社会において、その苛酷な共同体というものを弱い人間の罪を罰する厳格な暗い監獄として Hawthorne は描いているのではないだろうか。Hawthorne が自然の赤いバラを描くとき、彼の意図がうかがえるようである。それはつまり、

But on one side of the portal, and rooted almost at the threshold, was a wild rose-bush...which might be imagined to offer their fragrance and fragile beauty to the prisoner...in token that the deep heart of Nature could pity and be kind to him.... It may serve, let us hope, to symbolize some sweet moral blossom, that may be found along the track, or relieve the

darkening close of a tale of human frailty and sorrow.<sup>(7)</sup>

「しかし正面の一方の側には、ほとんど敷居のところに根をおろして、野ばらのしげみが……自然の深い心が囚人をあわれみ、彼に親切である証拠として、野ばらの芳香とかよわい美を与えているのだと想像できるほどであった。……願わくば、その花が話の道すじに見いだされるなにか美しい精神の花を象徴し、人間のもろさと悲劇をかたる物語の暗い結末をやわらげるものとして役だつことをのぞむだけである。」

として、Hawthorne はこの暗い作品に sweet moral blossom を咲かせることを意図しており、human frailty and sorrow として、人間の弱さから生じる罪の結果、苦悩と悲しみに打ちひしがれる人間に同情を寄せる彼の態度がここに示されている。

この作品は Hester がボストンのピューリタン社会から姦通女の印の A の緋文字をつけさせられ、生後三ヶ月の Pearl を抱いて監獄から出てくる場面から話が展開する。見物人のある女は旧約聖書のモーセの律法<sup>(8)</sup>を持ち出して死刑にすべきだと叫んだりした。背の高い Hester は豊かな黒髪 of 優雅な容姿を持ち、優美さと威厳を備えていた。恥辱の胸の A 文字には金糸の鮮やかな刺繍が施され、冷酷な民衆の眼に対し、彼女は誇らしげに傲然としてピューリタン社会の戒律と思想に反撥した態度を呈したのである。当時の処刑台は良き市民精神高揚のための効果的な道具と考えられていたが、処刑台の上で人々の侮辱と嘲りを受け、恥ずかしさに耐え続けさせるのは、個人の罪が如何なるものであれ、人間性に対する非道行為である。<sup>(9)</sup>と Hawthorne は言っているが、それがこの刑罰の目的であったのだ。

ところで Hawthorne は姦淫についての描写には全く筆を用いず、姦淫という人間的弱さ、脆さから引き起こされた罪とその罪の及ぼす影響を語る題材として、姦淫の罪の結果から物語が始められており、不倫の叙述を避けたのは彼の道徳観によるものであろう。彼は罪を sin として扱わず、人間の弱さ、つまり human frailty としていることから彼の意図がうかが

えよう。

さらし台の上でボストンのピューリタン社会の代表者である Governor Bellingham と長老の Wilson 牧師は Hester に姦通の男の名前を告白させようとするが、彼女はがんと口を割らなかつた。ヨハネ伝8章の、姦淫の場で捕えられたひとりの女を律法学者とパリサイ人がモーセの律法により、石打ちの刑に処することを持ち出してイエスを試す場面が想起される。自分に罪無き者が先にその女に石を投げよというイエスの言葉に誰も石を投げる者がなく、皆立ち去ってゆく。Hester の場合、苛酷なピューリタンの代表者達に告白を強いられるが、その相手を強く愛するあまり絶対に相手の名を口にしなかつたのは Hester の意志の強さであり、“And would that I might endure his agony, as well as mine!”<sup>(10)</sup>として堅く心に決めているのは一種の母性本能とも思われる強さであり、相手を擁護する愛の大きさの表われであるが、ピューリタン共同体の罪に対しての冷厳な戒律主義に対するレジスタンスが心の奥にあったものと思われる。なんとすれば、彼女は姦通の罪をどのように考えていたかを考察すると、確かに罪の意識があったに違いないけれど、彼女が感じていた罪意識は宗教と法律が一体化したピューリタン社会の戒律に対しての罪意識であって、自分が先に英国からボストンに来て2年近くも夫の Chillingworth から何の音沙汰もなかつた状況のもとで、自分自身では罪意識を感じていたとはあまり言えないのである。その証拠に The Pastor and His Parishioner の章で Dimmesdale と再会した時、Hester は、‘What we did had a consecration of its own. We felt it so!’<sup>(11)</sup>とっており、神の律法を犯したという宗教的な罪意識に苦悩するというよりも、彼女には男女の恋愛における精神と肉体の交わりを肯定した自由な思想、自然なヒューマニズムが見られるのである。

処刑台から監獄に戻った Hester と赤ん坊の Pearl は図らずも群集の中にまぎれていた夫の Chillingworth に健康を診てもらうが、彼女は暗い牢獄の中で自分の気持を夫にぶちまけ、彼との愛のない結婚を悔いている。Chillingworth に口説かれ、若かつたからとはいえ愛のない結婚に踏み切

ったのは Hester の精神的な弱さがあったのではなかろうか。Hester はピューリタン社会から処罰を受け、共同体から隔離され嘲罵されるが、彼女はこのニューイングランドを去らなかつた。この土地は自分の罪の場であり、そこが自分の地上の罰を受ける場となるべきであり、毎日の恥辱の責め苦によって自分の魂が清められ、苦難の結果一層聖いものになるだろうと自らに言い聞かせたが、一方心の奥では別の感情があって、そこには自分と一つに結ばれたと思った愛する人が住み、たとえ地上では Dimmesdale と一緒になれなくても最後の審判の場がふたりの結婚の祭壇として備えられる夢を抱いていたことを否定できない。<sup>(12)</sup> この点について Hawthorne の研究家 Male は、Hester が罪の場であるニューイングランドに留まることは罪の penance (罪ほろぼし) となるが、その動機は愛する人がいるためであるので、罪の償いに対する彼女の考えは部分的に rationalization であると指摘している。<sup>(13)</sup>

当時の清教徒の服装様式を特徴づけていたのは主に黒色の単純さであったが、英国の華美なものに対する嗜好も消えた訳ではなかつた。聖職者や判事などの公の任命式には細工された豪華な刺繍で飾られた帯や手袋が権力者達の公式の所持品であり、そのため Hester の針仕事の技芸が求められたのである。共同体の中では一般に禁じていたものが地位や富によって威厳をつけた人々には罷通つたのである。この点にも黙している Hester に批判的な思いがあったのかもしれない。彼女の技芸は好まれたが、花嫁の純白のヴェールを刺繍する仕事は彼女には決して来なかつた。Hester は粗末な衣服しか身につけず、余分の収入は慈善のために貧しい人々に使い、彼らに着物も作ってやった。そこには罪の償い、つまり penance という考え方があったと思われる。<sup>(14)</sup> Hester の善行にも拘らず、人々から白眼視され、軽蔑の言葉が彼女の胸を痛め、彼女は受難を余儀なくされたが忍耐し、共同体からは完全に孤立していたのである。

### 3.

Hester にはある時、自分の胸の緋文字が他の人達の胸に隠された罪を

探知する感応力を自分に与えていると半ば信じるような思いがした。彼女は敬虔な高德の牧師や判事の近くを通るとき、彼女の罪のA文字は感応の動悸を打つのであった。Hester にこのような感覚を与えるものは、“the insidious whispers of the bad angel”<sup>(15)</sup>かも知れないと Hawthorne は半ば真実か空想かとその表現を曖昧にぼかしているが、このような描写は *Young Good Man Brown* にも見られる。信仰を象徴する妻の Faith を後に残し、罪と暗黒の象徴である森へ入った Brown はある老人に付き添われて悪魔の集会に出る途中で馬に乗ってやって来た牧師や執事が、その集会に若くて美しい女が連れて来られるので急ごうと馬を走らせる。集会で牧師と執事は Brown に悪魔の仲間入りをさせようとして彼を祭壇のところへ連れてゆく。教師らしい悪魔がいて、‘Evil is the nature of mankind’<sup>(16)</sup>と説教を始める。Hawthorne はこのように幻想的世界の中で崇高だとされるあらゆる人間の心の奥に潜在する悪しき思い、罪を映し出している。また、*The Minister's Black Veil* では、Hooper 牧師はいつも黒いヴェールで顔を覆い、礼拝も結婚式にもヴェールをかけたまま説教するので民衆は皆恐怖に戦く。年老いて最後の臨終の床でも罪を象徴する黒いヴェールは単なる形ではないとして、‘I look around me, and, lo! on every visage a Black Veil!’<sup>(17)</sup>と切り切るのである。人間はすべて罪人である。<sup>(18)</sup>という聖書の真理を根底に、Hawthorne は特に崇高と見られているピューリタン社会の聖職者や権力者に対し、鋭い眼を向けて罪を洞察しようとする。Hester の恥辱の罪のA文字が感応したような罪を高徳な人々が犯したかどうかは別として、彼らの心の奥にも潜む原罪を奔放なまま、Hawthorne は深層心理の描写として Hester の心の幕に映し出すのである。

また、Hawthorne のニューイングランドのピューリタン社会に対する考え方はその代表者である Bellingham 知事の邸宅での Hawthorne の描写に見ることができる。彼の邸宅は英国の財産家の邸宅を模倣して設計され、家の壁はガラスの断片をばらばらに混ぜた一種の化粧しっくい一面に塗られており、太陽の光に反射してまるでダイヤモンドを散りばめたアラデインの宮殿のようである<sup>(19)</sup>と Hawthorne は述べている。その異様な秘教

的な模様や図形のため、緋色の服を着た自由奔放な野生の幼な子 Pearl はすかさずそれに感応し、跳んだり踊ったりしている。つまりピューリタンの代表者の中にキリスト教的でない野性の嗜好があるとしている。Bellingham 知事は自慢の豪華なエリザベス朝時代の家財を備えており、このようなピューリタン指導者に対して Hawthorne は、

But it is an error to suppose that our grave forefathers—though accustomed to speak and think of human existence as a state merely of trail and warfare, and though unfeignedly prepared to sacrifice goods and life at the behest of duty—made it a matter of conscience to reject such means of comfort, or even luxury, as lay fairly within their grasp.<sup>(20)</sup>

「しかし、われわれのきまじめな先祖たちが——いつも人間の生存を単に試練とたたかひの状態にすぎないと言ったり考えたりしていたが、また義務に命じられれば財産も生命も喜んで犠牲にするかくごではいたけれども——自分たちのつかんでいる安楽の手段やぜいたくをさへも拒否することを良心の問題としていたと考えるのは誤りである。」

として批判している。英国教会の豊かなふところ育てられた Wilson 牧師も説教壇では Hester のような非行の罪を公然と厳しく責めたが、私生活ではすべて気持ちの良いものに対する本格的な嗜好を持っていた。彼らは Hester に対し、黙示録のバビロンの女、紫と緋の衣を着てその額には、“MYSTERY, BABYLON THE GREAT, THE MOTHER OF HARLOTS AND ABOMINATIONS OF THE EARTH.”<sup>(21)</sup> 「奥義大なるバビロン、地の淫婦らと憎むべき者との母」と書かれた女のイメージで Hester を見ているのである。その彼らが Pearl を Hester から取り上げようと計画する。その根拠として仮に Pearl が悪魔の落とし子であるとすれば、Hester からこのような障害を取り除いてやる必要があり、一方 Pearl が道徳的にも宗教的にも成長する可能性があり、救われる身であるなら Hester よりもっと立派な保護者の手に委ねられるべきであるという理論である。母と子をこのような二者択一



の方法で引き離そうとする知事の考え方に対し、Hester は猛然と反抗し、  
'God gave me the child!' cried she. 'He gave her, in requital of all things  
else, which ye had taken from me. She is my torture, none the less!...Ye  
shall not take her! I will die first!'<sup>(22)</sup>と云ってのけ、Pearl を渡さなかった。  
次第に彼女は反ピューリタニズムの思想が強くなってゆくのである。

歳月が経ち、Hester は貧しい人や病人には進んで尽す修道女と自らな  
っていったが故にAの緋文字はもとのAdulteryの意味ではなく、Ableの  
意味であると人々から見られるようになり、こうしてHesterは苦難と共  
に強くなっていった。彼女の生活は熱情と感情から大きく思索へと変って  
いく。海岸近くに住み、ヨーロッパから流れてくる自由な思想を吸い、ピ  
ューリタン社会の外面的規則には従いつつも彼女の思想は社会の全組織が  
破壊され、新しく建設されるべきであること、また異性の性質そのものが  
本質的に改められねばならないというものであり、キリスト教化されたも  
のとは反するものであった。このような点からHesterは非ピューリタン  
の立場をとり、Stuart P. ShermanはHesterをTranscendentalistとして  
扱っている。<sup>(23)</sup>確かに人間社会から孤立し、共同体との切れた鎖の断片を  
も投げ捨ててしまったHesterにとっては彼女を取り巻くものはshameで  
あり、despairであり、solitudeであって、"These had been her teachers,  
—stern and wild ones,—and they had made her strong, but taught her  
much amiss."<sup>(24)</sup>とHawthorneはこの点についてはHesterに警告を発し  
ている。

Hesterは罪の苦悩により衰えてしまった愛するDimmesdaleを復讐の  
悪魔と化したChillingworthの手から救い出そうという思いが湧き上がっ  
てきた。苦悩に打ちひしがれているDimmesdaleと暗い野性の森で出会っ  
たHesterは自由な思想によって罪意識に沈む彼を元気づけ、ピューリタ  
ン社会から一緒に脱出することを説得して誘うのである。この場面は  
Dimmesdaleの罪意識とHesterのそれとの違いが明確に語られている。  
過去の罪に縛られたDimmesdaleの心は、'Of penance I have had enough!  
Of penitence there has been none!'<sup>(25)</sup>で表わされているのに対し、Hester

の思いは、'Let us not look back. The past is gone!'<sup>(26)</sup> と過去の一切を無視しようとする姿勢が見られるのである。Stuart P. Sherman は彼女の脱出計画について更に、"It was due to her vision of the possibility of reconstruction their shattered lives, and this vision in turn was the consequence of her internal emancipation from the power of the Puritan system of ideas."<sup>(27)</sup> としている。

ここで区別しておきたいことは、Hester は吸い込んだ自由な思想によってピューリタン社会の戒律的思想に批判的であり、Hawthorne がピューリタン社会を批判するときには Hester のそれとは異なっている。彼の批判の対象はキリスト教社会でありながらその指導者達は反キリスト教的なもの、つまり豪華で華美なものに対する嗜好があり、厳格な権威主義であることはこれまでに少し触れてきた。そして罪意識ということについては再び異なり、Hawthorne の罪意識はむしろ Dimmesdale の罪意識に表わされている。Hawthorne は Dimmesdale の罪について、"And be the stern and sad truth spoken, that the breach which guilt has once made into the human soul is never, in this mortal state, repaired."<sup>(28)</sup> と述べており、Hawthorne の執拗な罪意識をここで捉えることができよう。Hawthorne 自身の過去の罪に対しての意識を考えると、彼の先祖、William Hawthorne はクェーカー教徒に対する迫害者であり、その息子の John Hawthorne はセイレムの魔女裁判の苛酷な判事で19人の女たちを魔女と決めつけ、死刑の宣告をした。Nathaniel Hawthorne はその呪いが自分の代にまで尾を引いていると恐れている故に、The Custom-House で、

So deep a stain, indeed, that his old dry bones, in the Charter Street burial ground, must still retain it, if they have not crumbled utterly to dust! I know not whether these ancestors of mine bethought themselves to repent, and ask pardon of Heaven for their cruelties; or whether they are now groaning under the heavy consequences of them, in another state of being. At all events, I, the present writer, as their representative, hereby take shame upon myself for their sakes, and pray that any curse incurred by

---

them—as I have heard, and as the dreary and unprosperous condition of the race, for many a long year back, would argue to exist—may be now and henceforth removed.<sup>(29)</sup>

「その汚点は、まったく、深くしみこんでしまったために、チャーター通りの墓地にある彼の昔の枯れた骨は、くずれて全部土に帰ってしまっていなければ、今なおその汚点をとどめているにちがいない！ わたしのこの先祖たちが後悔して、自分たちの残虐行為のために神にゆるしを求める気持ちになったかどうか、あるいは彼らが別の姿となってその行為の重い結果に呻吟<sup>しんげん</sup>しているかどうか、わたしにはわからない。いずれにしても、この文章を書いているわたしは、彼らの代表者として、ここに彼らのために恥を背負い、彼らの招いたのろいが——わたしの聞いたように、また長いあいだの一族のわびしいみじめな状態から考えても存在していると思われるのろいが、今後取りのぞかれるようにと祈るばかりである。」

として、先祖の罪の呪わしい汚点による避けられない宿命感が Hawthorne に見られる。

#### 4.

Hester と Dimmesdale はニューイングランドの祝祭日に脱出を計画し、Dimmesdale は神の靈感が漂よっていると思われるような選挙祝賀の説教をした後、突然処刑台の上に立ち、Hester と Pearl を呼び寄せ、白昼、死を前に最後に罪の告白をする。これは為し終えていなかった彼の罪の penitence である。全身に重くのしかかっていた罪を民衆に告白した彼は昇天してゆく。Reverend Leonard J. Fick はこの罪の赦しに関して、repentance が不可欠であるという Hawthorne の立場は極めてオーソドックスであると評している。<sup>(30)</sup>Hester には Dimmesdale の突然の罪の告白が理解できない。彼女は、‘Shall we not meet again?’ whispered she...

‘Shall we not spend our immortal life together?...we have ransomed one another, with all this woe! Thou lookest far into eternity, with those bright dying eyes! Then tell me what thou seest?’<sup>(30)</sup> として Dimmesdale との地上での別離から天上での愛を望み、清らかな愛で結ばれることを希求するが、Dimmesdale は二人の犯した罪の故に永遠に結ばれる望みは持てないかも知れないが、ただ神のみ旨のままにと Hester を残して死んでゆく。Hester には愛となった行為も Dimmesdale には姦淫の罪意識となり、ここに Hester のヒューマニズムと Dimmesdale のピューリタニズムの峻厳な態度の違いを見るのである。Mark Van Doren の指摘するように、愛する人との永遠の愛が約束されていない Hester を悲劇のヒロインとしている感があると思われる。<sup>(32)</sup>

Dimmesdale の死後、Chillingworth も死に、Hester は Pearl と一緒に姿を消す。何年か後に Hester だけこのニューイングランドに戻って来て再び恥辱の A 文字を自らの手でつけたのである。彼女にとっては Pearl とヨーロッパで暮すよりもこの地に本当の生活があった。この土地で罪を犯し、そこになお彼女の penitence が残っていた。強制されてではなく、全く自分の意志によってつけた A 文字はもはや世間の嘲りの烙印ではなく、なにか悲しみを感じさせるものであり、畏れと尊敬の念をもって見られるひとつの典型となったのである。Fick は Hester の penitence について、“The words of her own free will are significant.”<sup>(33)</sup> であり、自らの意志によるものこそ penitence を具体化するものであるとしている。人々は Hester を苦難を克服した人として、特に若い婦人達は Hester に忠告を求めに来たのである。Hester のピューリタン社会に対する態度として作品の最後にその信念を Hawthorne は、

She assured them, too, of her firm belief, that, at some brighter period, when the world should have grown ripe for it, in Heaven’s own time, a new truth would be revealed, in order to establish the whole relation between man and woman on a surer ground of mutual happiness.<sup>(34)</sup>

「彼女は、またその女たちに自分の堅い信念を語り、この世が成熟していつかもっとかがやかしい神の時代のような時節になれば、新しい真理があらわれて、男と女のあいだのすべての関係もたがいの幸福というもっとたしかな土台の上に築かれるようになるだろうと話すのだった。」

と述べている。Hawthorne は具体的にはどのような社会になれば良いかと Hester に言わせてはいない。しかし brighter period を望み、new truth が明らかにされることを予想しており、これはピューリタン社会の改革を願望し、予期さえていることが明白である。Hester のような女性はピューリタン社会でなかったらあるいは自ら、より幸福な道を歩んだかもしれない。ただ Chillingworth が Hester に自分達の誤った結婚について、*'It was my folly, and thy weakness...from the moment when we came down the old church-steps together, a married pair, I might have beheld the bale-fire of that scarlet letter blazing at the end of our path!'*<sup>(35)</sup>と語っているように、年老いた Chillingworth との愛のない結婚に踏み込んだ Hester の弱さが悲劇の始まりであり、姦淫と偽善の罪を背負った Dimmesdale が苛酷なピューリタン社会の戒律の中で活路を見い出せなかった故の Hester の悲しみを見据えなければならないと思われる。

さきにバラのイメージと Hester との関係について述べてきたが、ここで結論づけるにあたって、Bellingham 知事の邸宅で Wilson 牧師が Pearl の出生について幼い Pearl に問い質した時、*"...,the child finally announced that she had not been made at all, but had been plucked by her mother off the bush of wild roses, that grew by the prison-door."*<sup>(36)</sup>と Pearl はとっさに答えるが、やはり Hawthorne の中に a wild rose-bush を Hester と結びつけている意図がうかがえるのである。Fogle も監獄は無慈悲な人であり、バラは自然を哀れむものであり、灰色のピューリタンの背景に対して赤いバラは Hester であるとしており、要塞のような監獄の側でバラは哀れにも弱くみえるが自然の活力は強いものであるとしている。<sup>(37)</sup>

Hawthorne がこの作品の冒頭で願っていたように、若い情熱と人間的な弱さから罪を犯し、こうした暗い苛酷なピューリタン社会の中で愛する人のために懸命に生きた Hester の愛が、a wild rose-bush として一心に道徳の花を咲かせ、暗いピューリタン社会と対照され、その中で a tale of human frailty and sorrow として描かれているのであり、Dimmesdale の墓の近くに少し隔たりをおいて Hester の墓が掘られる。その墓石には盾形の紋地のようなものが彫られ、Hester とこの物語を象徴するように、“...; so sombre is it, and relieved only one ever-glowing point of light gloomier than the shadow:—‘ON A FIELD, SABLE, THE LETTER A, GULES.’”<sup>(38)</sup> 「この物語は、あまりに暗く、ただ、その影よりもなお陰うつな光の一点がたえず燃えていることによるのみ救われているのである。——『暗黒の野に、真紅の文字A』として作品が終っており、Hawthorne はピューリタン社会の中で Hester が罪を背負い、悲しみながらも愛のために懸命に生きようとした彼女の姿をひとつの光明として位置づけ、微かな燃える灯を残そうとしたのである。

### Notes

- (1) Nathaniel Hawthorne, *The Scarlet Letter*, ed. William Charvat and others, (Ohio State Univ. Press, 1962), I, p.48. 以下この版のテキストを S. L, I と略す。
- (2) アト・ド・フリース著、山下主一郎主幹他訳「イメージシンボル事典」大修館 1984, pp.532-534.
- (3) Ibid., p.32.
- (4) Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales*, ed. William Charvat and others, (Ohio State Univ. Press, 1974), IX, p.435.
- (5) S.L,I, p.47.
- (6) Seymour L. Gross, *A Scarlet Letter Handbook*, ed. (California: Wadsworth Publishing Company, Ink., 1960), p. 53. 以下この本を Gross, S. L.H. と略す。
- (7) S.L, I, p.48.
- (8) Lev. 20:10.

- 
- (9) S.L,I, p.55.
  - (10) Ibid., p. 68.
  - (11) Ibid., p.195.
  - (12) Ibid., p.80.
  - (13) Roy R. Male, *Hawthorne's Tragic Vision* (New York: The Norton Library, 1957), p.105.
  - (14) S.L,I, p.83.
  - (15) Ibid., p.86.
  - (16) Nathaniel Hawthorne, *Mosses from an Old Manse*, ed. William Charvat and others, (Ohio State Univ. Press, 1974), X, p.88.
  - (17) Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales*, ed. William Charvat and others, (Ohio State Univ. Press, 1974), IX, p.52.
  - (18) Rom. 5:12.
  - (19) S.L,I, p.103.
  - (20) Ibid., p.108.
  - (21) Rev. 17:5.
  - (22) S.L,I, p.113.
  - (23) Gross, S.L.H, p.44.
  - (24) S.L,I, pp. 199-200.
  - (25) Ibid., p.192.
  - (26) Ibid., p.202.
  - (27) Gross, S.L.H, p.44.
  - (28) S.L,I, p.200-201.
  - (29) Ibid., p.9-10.
  - (30) Reverend Leonard J. Fick, *The Light Beyond* (Westminster, Maryland: The Newman Press, 1955), p.128.
  - (31) S.L,I, p.256
  - (32) Gross, S.L.H, p.49.
  - (33) Reverend: Leonard J. Fick, *The Light Beyond* (Westminster, Maryland: The Newman Press, 1955), p.130.
  - (34) S.L,I, p.263.
  - (35) Ibid., p.74.
  - (36) Ibid., p.112.
  - (37) Richard Harter Fogle, *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark* (University of Oklahoma Press: Norman, 1964), p.14.
  - (38) Ibid., p.264.

本文中のテキストの訳は、刈田元司訳「緋文字」旺文社、昭和42。を参照した。